



Subaru

男声合唱団

ニュース№725

'20. 2. 18

昂 13 回コンサート第 1 部・第3部の全曲 の通しレッスンに声を合わせる！

2月16日

□ 2月16日(日)14:00～17:00 昂定例レッスンが開催されました。佃さんの体操・千秋さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生と伊藤副指揮者の指揮で、「第13回コンサート」のプログラム第1部と第3部の全曲を通しレッスンの形で合唱練習しました。新しく歌う歌（新曲）の習得がようやく形となり、次に今回のコンサートで歌う昂愛唱歌（過去のステージで好評であった）を、新曲に臨む気持ちで、楽譜を持ち、各パートの音程・音の長さ・リズム等を再確認しながら、指揮者の指揮を見ながらの懸命の音合わせに専念するレッスンとなりました。



本並先生の指揮で、「草競馬」「懐かしきケンタッキーの我が家」「白樺」「道」「母なるヴォルガを下りて」を、休憩・連絡事項の報告をはさんで、伊藤副指揮者の指揮で「U Boy!」「朝露」「飲みのナーダム」「見上げてごらん」「ゆらゆら春を」「死んだ男の」を、引き続き、本並先生の指揮で、「方正の青い空」「地雷ではなく花をください」「昂はうたう」の全14曲、1曲ごとを懸

命に歌いこみ、
2時間を歌い
通しました。





最後に本並先生は、「きょうはたくさんの曲を歌いました。重点的にレッスンした曲も含めて。全体にどんな感じになるか？今日のレッスンで、指揮者のイメージが膨らんできました。良くなってきました。これに「音登夢」の弦楽器とピアノのピアノが入る。すばらしいコンサートになること確実であると実感しました！チケットを売っていきましょう！みなさんの健闘に期待します。頑張りましょう！」と激励のメッセージを送られました。

ピアノ伴奏は森二三さん。参加者は全31名でした。

□ 連絡報告事項

(1) 昇強化レッスンについて

「13回コンサート」にむけて、定例レッスンの他に、強化レッスンが予定されています。スケジュール予定表に組み込んでください。練習曲目は既に発表されています。

3月 8日(日) 10:00~17:00 (なお「嶋本晃レッスン」が15:00~17:00)

4月26日(日) 10:00~17:00

5月10日(日) 10:00~17:00

5月22日(金) 18:00~20:30

(2) 新人強化レッスンについて

2月25日(火) 予定の新人強化レッスンは都合により中止します。

2月28日(金) は予定通り開催します。

(3) 休部している小林誠さんが久しぶりに元気にレッスンに参加されました。お子さんが誕生し(生後3か月)、仕事も忙しく頑張っておられます。6月より月1回第3日曜日にレッスン参加するということで、コンサートには舞台に立てないが、聴きに行きますということです。

(4) 「大阪のうたごえ祭典2020」当日の昇出演者の集合・動きについて(2月23日(日))

フェニーチェ堺:南海高野線「堺東」駅下車 西口を出て南へ徒歩8分

○昇集合時間:2月23日(日)フェニーチェ堺 9:00大スタジオ(2F)に集合してください。

○着替え室は「楽屋5」(2F)です。

○荷物・コート等は小スタジオB(2F)に置き(管理者常駐)、**出演チケットを常時携帯し、動いてください。**(チケットがないとリハーサル時舞台に行けません。荷物置き場にも入れませんので、常時携帯してください。)

リハーサル・練習・本番前集合・本番時刻について

○舞台リハーサル・舞台本番は 舞台裏(1F)で並び⇒下手入り⇒演奏⇒上手ハケ

○9:10~9:30「シヤハンバ」 大スタジオ(2F)練習

9:34~9:44「君死にたまふ」 舞台(1F)リハ

9:55~10:35「津軽平野」 多目的室(2F)練習

10:35~10:55「君死にたまふ」 多目的室練習

10:45~10:55「いのちの海」 多目的室リハ

11:17~11:27「シヤハンバ」 舞台リハ

○本番

12:45「シヤハンバ」 3F席でスタンバイ(赤シャツ)

13:10「君死にたまふ」 大スタジオ(2F)スタンバイ(白シャツ、黒ズボン)

14:30「津軽平野」 //

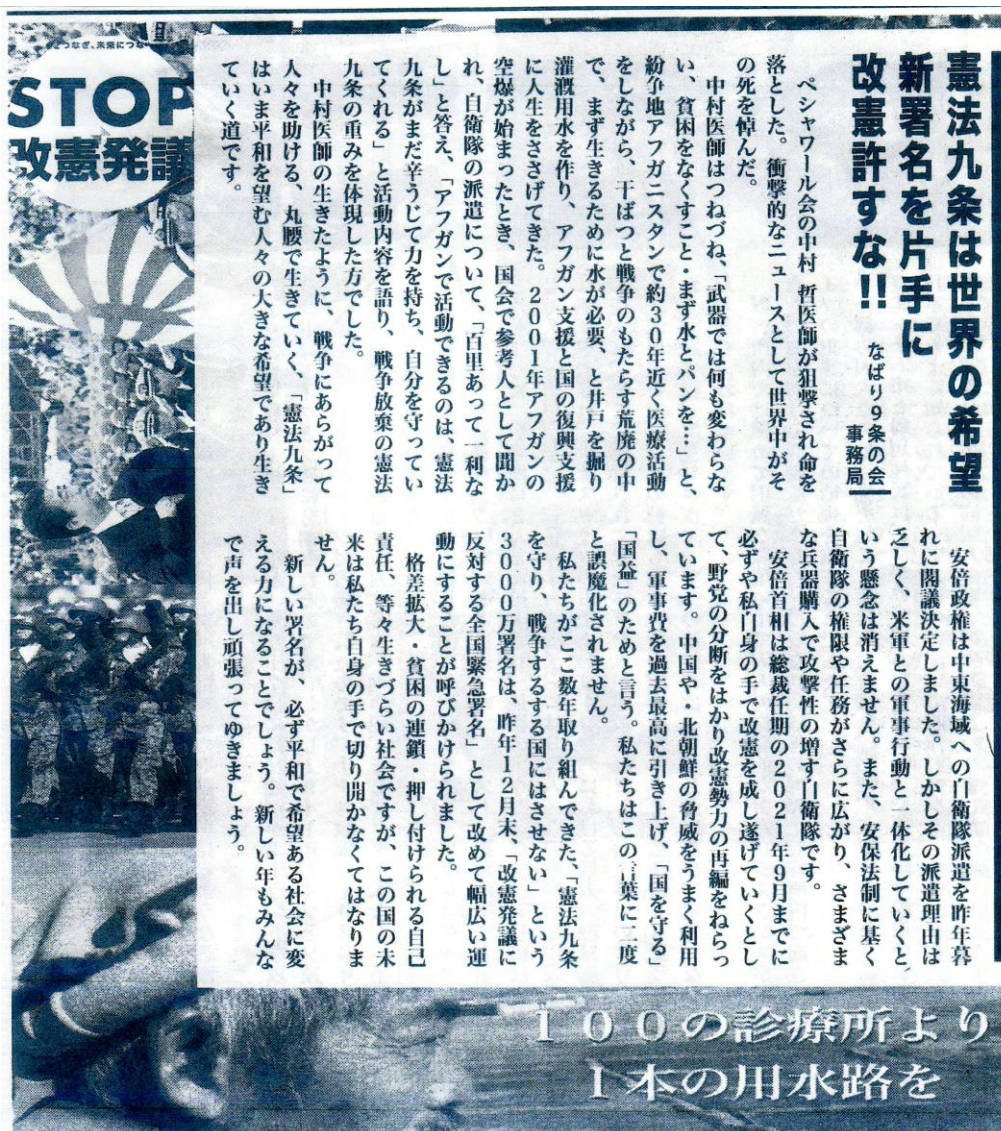
15:00「いのちの海」 //

なお、大スタジオは2F、舞台へは2F奥舞台に集合して、順次1F舞台へ移動。
「他目的室」:2F

なお、当日の出演者の要領については、

「昴」メンバーの舞台並びに位置「君死にたまふことなかれ」舞台の立ち位置」(2020・2・15版)
「プログラム別 出演者のうごき一覧表」『企画ニュース2月2日企画委員会発行』(すでに配布済み)「昴ニュース724号」を参照してください。

(投稿)T2高田さんより記事をいただきました。「ペシャワール会の中村哲医師の生前のご活躍とともに、日本の政治・外交・文化交流のあり方での示唆に富む内容」
そして高田さんが昨年タリン合唱交流のみなさんとともに訪問されたアウシュヴィツの生々しい報道等・・・



**憲法九条は世界の希望
新署名を片手に
改憲許すな!!** なばり9条の会
事務局

ペシャワール会の中村哲医師が狙撃され命を落とした。衝撃的なニュースとして世界中がその死を悼んだ。

中村医師はつねづね、「武器では何も変わらないうい、貧困をなくすこと・まず水とパンを」と、紛争地アフガニスタンで約30年近く医療活動をしなが、干ばつと戦争のもたらす荒廃の中で、まず生きるために水が必要、と井戸を掘り灌漑用水を作り、アフガン支援と国の復興支援に人生をささげてきた。2001年アフガンの空爆が始まったとき、国会で参考人として聞かれ、自衛隊の派遣について、「百里あつて一利なし」と答え、「アフガンで活動できるのは、憲法九条がまだ辛うじて力を持ち、自分を守ってくれる」と活動内容を語り、戦争放棄の憲法九条の重みを体現した方でした。

中村医師の生きたように、戦争にあらがって人々を助ける、丸腰で生きていく、「憲法九条」はいま平和を望む人々の大きな希望であり生きていく道です。

安倍政権は中東海域への自衛隊派遣を昨年暮れに閣議決定しました。しかしその派遣理由は、米軍との軍事行動と一体化していくという懸念は消えません。また、安保法制に基づく自衛隊の権限や任務がさらに広がり、さまざまな兵器購入で攻撃性の増す自衛隊です。

安倍首相は総裁任期の2021年9月までに必ずや私自身の手で改憲を成し遂げていくとして、野党の分断をはかり改憲勢力の再編をねらっています。中国や・北朝鮮の脅威をうまく利用し、軍事費を過去最高に引き上げ、「国を守る」「国防」のためと言う。私たちはこの「国を守る」と誤魔化されません。

私たちがここ数年取り組んできた、「憲法九条を守り、戦争する国にはさせない」という3000万署名は、昨年12月末、「改憲発議に反対する全国緊急署名」として改めて幅広い運動にすることが呼びかけられました。

格差拡大・貧困の連鎖・押し付けられる自己責任、等々生きづらい社会ですが、この国の未来は私たち自身の手で切り開かなくてはなりません。

新しい署名が、必ず平和で希望ある社会に変える力になることでしよう。新しい年もみんなで声を出し頑張ってください。

100の診療所より
1本の用水路を

Travel Report 旅でたどる戦争の爪痕 Memory of a war

ポーランド「アウシュヴィッツ強制収容所」博物館

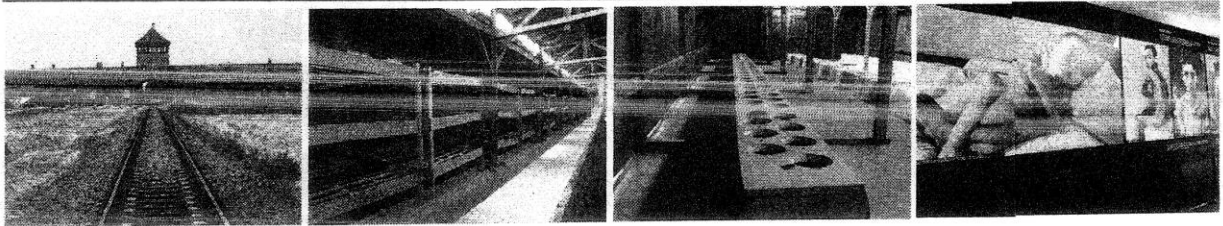
訪問記

Vol.1

百合が丘 こうたわこう

写真 藤田 孝弘

写真/こうたわこう



そこは広大な土地を有刺鉄線で張り巡り、大きな工場跡地のような光景が広がっていました。7月初旬ポーランドからバルト三国（リトアニア・ラトヴィア・エストニア）を巡る旅の機会を得て、世界的に有名なユネスコの「世界文化遺産」になっている「アウシュヴィッツ強制収容所」博物館を見学することができました。

そこはまさしく侵略戦争と人種差別、人権無視の地獄絵図を見えるような悲惨な遺産の象徴ともいえるむごたらしい場所でした。

1939年9月1日ドイツ軍が、また17日にはソ連軍がポーランドを攻め占領し、ポーランドはドイツとソ連に分割されたのです。しかし1941年ドイツとソ連との戦争が始まり、ポーランド全体がドイツに占領されたのです。ナチス政権は1933年から既に強制収容所を建設し、ナチス政権に反対する人、刑事犯、そしてユダヤ人など「不必要な人材」として収容所入れられました。

第二次世界大戦後ドイツが占領した国にも収容所を造り、アウシュヴィッツもドイツ国家中央政府により運営され、この収容所は世界でホロコースト（絶滅政策）大量虐殺暴力の象徴となりました。収容所はどんどん拡大され、最初のアウシュヴィッツ1号には1万2千人から2万人、2番目の収容所（ビルケナウ収容所）には9万人、この収容所を建設するために住民は強制退去され、ナチスドイツの占領下のヨーロッパにおける最大の絶滅施設であるガス室が造られ、そこで連行されてきたユダヤ人が毒殺されました。3番目の3号収容所には1万1千人以上を収容、その他にも数十ヶ所の収容所がありその広さは40km²にも広がっていましたと記録され、アウシュヴィッツへの連行者は130万人に及び、犠牲になった人が110万人とも言われています。

収容所内では極めて困難な環境の中で囚人の自発的な組織レジスタンスが結成され、囚人たちの命を助ける活動をしました。重要な活動は外の世界に収容所内で起きているナチスドイツの犯罪についての情報を流すことでした。

一部の囚人たちは反乱を起こし衛兵隊員を殺し、焼却炉を爆破しました。収容所のあるオシフェンチム市と周辺住民は、命がけで囚人たちの食べ物や薬を届け脱走の手助けをしました。日本でもよく知られている「アンネの日記」の原作者アンネ・フランクも二か月間収容されましたが、隠れ家生活の同居人申唯一の生還者となりました。

収容所博物館の膨大な証拠遺産

収容所の一部を3時間余りかけてガイドさんに案内してもらったと、遠方から列車で運ばれてきた収容者たちの集団、通路の壁には犠牲となった収容者の顔写真、大きな部屋がいくつもありそこには犠牲になった収容者たちが使用していた衣類や靴日用品など大量の遺品が大切に保管されていました。また、やせ細った子供たちの写真、囚人が寝る3段ベッド、長いコンクリートに丸い穴をあけただけで仕切りもないトイレ、囚人を銃殺した場所等、数えきれないほどの収容施設は、卑劣極まりないこれが人間のやることなのか、悲しみと怒りがこみ上げてきました。

（次号に続く）